

自己評価報告書(最終報告)

コース等名	授業実践・カリキュラム開発コース	記載責任者	小野瀬 雅人
-------	------------------	-------	--------

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教員養成の質保証

大学の機能別分化・機能強化が求められる中、本学は教員養成大学として高度専門職業人としての教員を養成することを目標としている。教員養成の質保証のため、専攻・コースではどのような取り組みを行うか、具体的な方策を示してほしい。

1. 目標・計画

授業実践・カリキュラム開発コースでは、カリキュラム、授業構成・実践、学修評価等についての専門的・実践的な知識と技能を有し、授業実践・カリキュラム開発のリーダーとして、授業研究、校内研究、教員委員会における研修等で指導的な役割を担える教育を養成することを目的としている。これらの目標を達成し、高度専門職業人としての質保証を実現するため、各教員は、大学の授業で、3領域11観点の到達目標の中から各科目ごと達成すべき目標を設定し、ワークショップやシミュレーション、事例分析等を取り入れた授業を積極的に行う一方、実習においては、学生の勤務校との連携をとりながら、勤務校での課題解決のため、ワークショップ等により勤務校教職員との課題の共有化を図りつつ、授業研究や学校のアセスメントに基づく課題解決支援に学生とともに丁寧に対応する。学生の指導においては、そのプロセスで授業実践・カリキュラム開発に関する高度な実践指導力を育成していく。

2. 点検・評価

当初の目標・計画にしたがい、教職大学院における現職教員学生の指導にあたっては、学生の勤務校との連携をとりながら、勤務校の課題解決はもとより、勤務校の全教員の教職実践力向上を図る取組を進めることができた。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

教職大学院はこれまでコースを越えての教員間、学生間、学生と教員間の交流を大切にしてきた。1年次ではコースを越えたチーム編成で院生室を用意し、そこに担任教員を中心に全専攻で指導・支援を行っている。また、2年次ではコースごとに院生室を用意し、日常的にアットホームな雰囲気が保たれている。各ゼミにおいても教員によるきめ細やかな指導が行き届いている。24年度もこれまでの指導・支援のよさを生かしつつ、生活環境のさらなる整備改善を図っていく。

2. 点検・評価

当初の目標・計画どおり、これまでの指導・支援のよさを生かした教育・学生生活支援を進めることができた。

Ⅱ-2. 研究

1. 目標・計画

教職大学院のカリキュラム開発と教育成果の評価の在り方について、専攻と一体となって研究を行う。また、各教員はそれぞれの専門分野で課題をもち研究を進めているが、それぞれの研究成果を教育実践にどう結びつけていくのかを明確にすると同時に、教職大学院生や院生の勤務校における研修等を通して、研究成果の教育実践場面での有効性の検証を進める。

2. 点検・評価

コース教員は、専攻で進めている鈴鹿市教育委員会との連携事業に、自らの専門分野から関わり、その成果を「鳴門教育大学学校教育研究紀要No.27(2013年)」にまとめた。また、コース各教員は、教職大学院生の勤務校において、全教員を対象とした研修も行い、その評価については、教職大学院生の学修成果報告書にも記載された。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

教職大学院は、昨年度、大学評価協会による認証評価を受診し、4年にわたる実践の成果と課題も明確になった。本学教職大学院における取組は認証評価において高い評価を得たが、今後もそれに甘んじることなく、大学執行部の指導の下、教職大学院の4コースが協力関係を保ちつつ、わが国の教職大学院のモデルづくりを展開していく。また、教職大学院の中だけにとどまらず、本学教員としての自覚を持ち、全学的な委員会や行事等にも積極的にかかわっていきたいと考える。平成24年度においては、村川教授は基礎・臨床系教育部長、西村教授は教職キャリア支援センター長として、大学運営の中核としてかかわる。

2. 点検・評価

本年度も、昨年度に引き続き、これまでの教職大学院4コースそれぞれの成果と課題を踏まえ、新しい教職大学院のモデルを検討し、キャリアに応じたカリキュラムの策定と25年度からの実施に向けたコース再編に取り組んだ。また、大学運営との関連では、村川教授が基礎・臨床系教育部長、西村教授が教職キャリア支援センター長として活動した。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

教職大学院はその性格・特色上、附属学校園や県内外の一般学校との連携・協力が極めて重要である。受け入れている院生の学校のみならず、実習校指導の際には、その近隣の学校への指導・支援や情報発信に努める。また、今後の大学院進学への関心・意欲を喚起する意味でも、指導・支援を必要とする学校現場や教育委員会と連携・協力を推進する。

2. 点検・評価

本コースでは、附属小学校、附属中学校の共同研究者として参画したほか、徳島市教育委員会や鳴門市教育委員会と連携・協力のもと学校支援を行う一方、県外の鈴鹿市教育委員会とも連携し、学校支援を行った。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

コース教員5名のうち4名が兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科の併任教員として参画し、博士課程学生の研究指導にあたった。